

■強烈なサウナ浴

サウナでのふざけ合い方も、日本人の常識と比較すると規格外だ。ショットグラスに四～五杯ウオトカを飲むと、酔いが少し回ってくる。そこでサウナに入って汗と共にアルコールを出す。ロシアのサウナには白樺の葉がついた枝の束が必ず入っている。一種のアロマセラピーなのだが、この枝の束で背中を叩く。この辺で、一度、冷水のプールに入る。ちなみに雪が積もっている季節は、外に出て素っ裸で雪の上でころげ回る。そして、食堂にもどる。

再び山海の珍味で、ウオトカで乾杯を重ねる。そしてサウナに入る。意識が朦朧としてくると、エリツインがいたずら半分股間を白樺の枝の束で突ついたりする。これはひどく痛いので、みんな飛び上がる。あるいはサウナの中での男同士のキス合戦になったり、首筋を噛み合ったり、ときにはお互いに睾丸を握り合うなど、人間と動物の間くらいドラマが繰り広げられる。

あるとき「睾丸を握り合うのは品がない」と言ったら、クレムリンの要人に「旧約聖書を読んでもしろ」と言われた。

・・・

神にかけて誓うきは睾丸を握るといふイスラエルの古い伝統がロシアには今も生きているのである。人生で何度も修羅場をくぐり抜けてきたエリツインは信仰心に厚い。

■「最高権力者しか北方領土問題を解決することはできない」

北方領土交渉に関して、「首脳間の個人的信頼関係にもとづく外交は邪道である」という批判は、ロシア政治の内在的論理を知らない者の意見だ。ロシアにおいて、ある種の問題は、官僚レベルはもとより閣僚レベルでも解決できない。開戦の決定、和平の決定、そして領土問題での譲歩は、首脳の決断によってしかなされないのである。ロシア皇帝、ソ連共産党書記長、ロシア連邦大統領など、その名称はどうでもいい。とにかく最高権力者しか北方領土問題を解決することはできないのである。

北方領土に関しては、日本が要求を突きつける側である。ロシアは、北方四島がいまのままで、実質的に困ることはない。それならば、交渉術として、日本側がロシアの論理に合わせる必要がある。すなわち、総理が直接乗り出して、交渉にあたるしか、北方領土を取り戻すことはできないのである。

■佐藤氏が目指したこと

私が外交官としてやりたかったことは、

歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方四島を日本に取り戻すこと

日本外務省に国際水準の対外インテリジェンス機関をつくること

の二つだった。

この二つの目標のために、私は文字通り、滅私奉公で取り組んだ。結局、この目標は二つとも達成されなかった。しかし、私は間違った目標を設定したとは思っていない。

北方領土交渉については、ロシアの政治家をソープランドで接待する話（「3 私が体験したハニートラップ」）や、詐欺まがいのロシア支援プロジェクトで政治資金を流す計画（「7 私が誘われた国際経済犯罪」）などについても書いた。ありとあらゆる可能性を追求しなくては、北方領土を取り戻すことなどできない。人間は欲望をもつ存在だ。その欲望にどのように付け込んでいくかが交渉術の要諦なのである。

人間には、さまざまな欲望がある。性欲、金銭欲、出世欲、名誉欲などさまざまな欲望がある。交渉術の研究を裏側から見れば、欲望の研究でもある。相手の欲望にどのように付け込んで、こちら側に有利な状況をつくるかということだ。

インテリジェンス機関は、欲望研究の専門家集団でもある。従って、人間のどの欲望を、どういう形で満たすと、相手を協力者に取り込むことができるか、いつもそのことばかり考えている。ホテルの部屋に入るとベッドに全裸の金髪娘が寝ていて、その姿を写真に撮られて脅されるなどというハニートラップは、三流スパイ小説の中だけの話だ。人間は脅して来る者に対して、心の底から協力することはない。従って、標的とする対象が窮地に陥るのを待って、「助けてあげる」というのが、プロの工作員のやり方なのだ（「2 本当に怖いセックスの罠」）。

また、カネで情報を買うことができるというのも、インテリジェンス業界の実態と異なる（「5 賢いワイロの渡し方」）。カネはいくらもらってももっと欲しくなるという特殊性をもった商品だから、カネが好きを相手にインテリジェンス活動をしてはならない。こういったことを含め、インテリジェンスの現場の雰囲気を書き本ではだいたい伝えることができたと思う。